

APWSS 東京大会を終えて

財団法人 日本植物調節剤研究協会会長 戸町義次

国際会議では使用する外国語の理解が充分でない点から、とかく詳細な議論までに至らないことが多く、会議そのものの効果を私は余り高く評価しない。しかし講演を通して参加国の研究方向や水準を概略把握できたり、個々の接触によって各自の抱く疑問を解くなどの効果は決して少なくない。それにもまして重要なのはコーヒーブレイク、ウェルカム・パーティなどを通して、お互いに親密になることで、それによって将来をも含めて知識・情報・技術の交換が活発化することを期待できよう。

わが国にAPWSSの第5回大会の開催を実現した意義は、以上の一般論に加えて、とかく引き込み勝ちの農業技術者、そのうちでも最も泥臭い作物技術者を檜舞台に引き上げることにあったと思う。私の長い経験によれば、地方技術者も地域会議を経て中央会議を経験すると物お

じせず、余裕ができ、洗練された振舞いで思うことを整然と発言するようになるものである。事実、日本の技術者の発言態度は、前回ニュージーランドの場合に比べて格段のスマートさを見せたのはホームグラウンドのせいばかりではないと思う。これら今回檜舞台を踏んだ諸君の今後の進歩が楽しみである。

私はこの2年間、本大会の組織委員長を引き受け、委員諸君の絶大な努力によって無事に大会を終えた。各委員のほか農林省・関係学会・神奈川県農業総合研究所・関係会社は勿論のこと、舞台の裏方さんを努めた多くの人達の協力があったのも忘れられない感謝である。幸い外国人出席者からも、満足の声を何度か聞いた。名ばかりの委員長であったけれどもやはり嬉しいことである。(昭和50年10月)

日本における除草剤の概要 —第5回APWSS会議での講演—

財団法人 日本植物調節剤研究協会研究所長 中山治彦

日本における除草剤の現況に対する一つの要約は、各除草剤の出荷高とそれらの使用面積からうかがうことが出来る。1974年には、除草剤の総出荷額は約356億円に達した。この額

は農薬全部の約3分の1に相当するもので、除草剤は過去数年間を通じ、毎年約20%の増加率で伸びてきており、もしもこのような状態が続くならば、2～3年以内に現在一位にある殺